

大学生は、意外と暇だ。

今は実家を出て姉貴とふたり暮らしだけど、そのうち、別々に暮らすことになるのかな。

来年は俺も就職活動があるし、そろそろ、将来のことも考えなきゃいけない。

……それにしても、姉貴は部屋にいないのかな。妙に静かだけど……

「ん……こう、かな? でも、なんか違う気がする……。もっと腰を使って……こう……こう……っ……」

なんだ、俺の部屋にいたのか。

また台本のチェックでもしてるのかな?

ドアの前で突っ立ったままいるのも何だし、部屋に入ろう。

「姉貴、俺の部屋でどうしたの?」

「へ? ……ああっ、ごめんっ。

ベッド、勝手に借りちゃってっ……」

あと、枕も……ま、股に挟んだのは、別にヘンなことをしてたわけじゃないよっ?」

「……………」

言わなきゃ気付かなかったかもしれないのに。

姉貴は股に挟んでいた俺の枕を定位置に戻して、何事もなかったように、こちらを振り返る。

「……なんて、今さら言い訳しても無駄だね。なんかお姉ちゃん……」

このままだと、ダメになっちゃうかも……」

「その……結論を先に言っとね……」

ベッドの近くまでいくと、いつもの甘い香りが漂ってくる。

そして、急に肩へ力を入れたかと思うと、いきなり目の前で姉貴がベッドから立ち上がった。

「お姉ちゃん、やっぱりバージン捨てたいの！」

「へ？」

「……あ。今ちよっと引いたでしょ？  
もお、「っちは真剣に悩んでるのに……」

引いたというか、なんというか。

弟としては、『そうですか……』と反応するしかない。

「ていうか、待ってっ……」

後ずさる俺との間合いをさらに縮めて、  
姉貴の手がこちらの下腹部へと伸びる。

あっという間にベルトを外されて、  
パンツごと、ズボンをずり下ろされて。

「でも、お姉ちゃんの気持ちも少しはわかるでしょ？  
毎日こうやって弟のおんちんを触って、  
お口でもしてあげてるのに……  
セックスの経験がないなんて……さ」

弟の気持ちだって、わかってほしい。

毎日、姉に手コキやらフェラをされてるのに、  
童貞だなんて。

「……今、収録中のゲーム、お姉ちゃんが演じてるのは、  
清楚なんだけど、めっちゃ騎乗位が上手いっていう  
ギャップキャラなんだよね」

「あ、騎乗位ってわかるよね？  
女の子が、男の人の上に跨がって腰を振るっていう……  
ちようどさっき、お姉ちゃんが枕を股に挟んでやってた  
みたいに……」

なるほど、それで俺の枕が実験台にされてたのか。

俺に見られて動揺してたから、  
オナニーでもしてたのかと思った。

とはいえ、『なぜ俺の枕を使った？』という話だけれど。

「……自分でも、やりすぎなのはわかってるんだけどね」

「いくら仕事のためとは言え、弟のおちんちんをこんな風に弄ったり、フェラチオまでさせてもらったのに……こうやって触ってたら、お姉ちゃんに欲情して、押し倒してくれないかなとか期待もしてたりして……」

余裕で欲情はしてるけど、押し倒すという発想には至っていなかった。

そもそも、漫画やゲームではよくあるシチュだけど、人を押し倒すって、かなり難易度高い気がする。

そんな素直に倒れてくれるとは限らないし、押し倒してから行動も問題だ。

「……でもね。お姉ちゃん、ほんとにこの仕事が大好きなの。だから、もっともっと演技も上手になりたいし、ラジオで真剣に悩みを相談してくる人たちに、きちんとした答えを返してあげたい……」

「そのためだったら……エロい女だっと思われてもいい。……ふつ。弟としては嫌かな？  
すぐおちんちんを触りたがるお姉ちゃんなんて……」

どうしても勘違いしがちだけど、姉貴が俺に手コキやフェラをしてくれるのは、あくまで仕事のため。

……でも、俺はそんな割り切りができなくなってきた。

実際問題、毎日こんな風に優しく股間を触られて、射精の管理をされていたら、特別な感情だって湧き上がってくる。

この先、姉貴以上の人と出会って、恋愛できるなんて、今は想像もできない。

「ん……出ちやいそうになっちゃった？  
いいんだよ、我慢しなくても……  
いつつもイキそうになると、『もったいないから』ってお姉ちゃんの手を止めようとするんだもん」

「……それとも、今日はお口の中で出したい？」

こんなの、ダメになるに決まってる。

姉貴とこういう関係になってからは、エロゲーをプレイする機会も減ってしまった。

性欲もぜんぶ持っていかれてたし、  
毎日が、ゲームより刺激的すぎて。

「いいよ、してあげる……ん……はあ、む……ちゅ、んん……  
はあ、れろっ、ちゅっ……んふ、ちゅっ……れろっ、  
れろれろれろっ、ちゅうう、ちゅっ、ちゅるるう……」

「んん、ちゅっ……ぽ……はあ、ふふっ……毎日出してるのに  
いつも元気だね……」

姉貴は、いつも嬉しそうに俺のを咥えてくれる。

射精すると、さらに喜んでくれるから、  
何度だって出すところを見せてあげたくなる。

おそらく姉貴からしてみたら、  
手コキやフェラは、自己承認欲求を満たす  
行為のひとつなんだろう。

だから、俺のが大きく反り返ると、  
恍惚とした表情を浮かべてキスの雨を降らしてくる。

女の子が言う『おっきいのが好き』というのは、  
そう言った精神的な充足も、関係しているのかもしれない。

「……ねえねえ、本当に手や口だけで満足？  
このまま勢いで、お姉ちゃんとしてみない？」

亀頭を、ぐりっぐりっとな手のひらでひねりながらの  
このセリフはひどい。

あまりにも、童貞殺しだ。

「……くす、誘惑してやった。そんな困った顔しても、  
おちんちんはやる気満々みたいだよ……？」

誘惑と言うには、かわいすぎる誘い文句。

色気はあると思うんだけど、語り口がさっぱりしてるから、  
健全な行為と勘違いしてしまう。

「あ……じゃあさ、こうしない？  
とりあえず、今はあ……えいっ！」

「！？」

手コキの気持ちよさに浸っていた中、  
突如、姉貴が俺の肩を押してくる。

同時に体重をかけられ、抵抗もできないまま、ベッドの上へ押し倒された。

「……あら、大人しく押し倒されちゃうなんて、どっちが女の子だかわからないね」

「でも、ちょうどよかった……一度、男の人に前戯っていうのしてみたかったんだよね……」

ここまでされて、ようやく姉貴の『スイッチ』がオンになっていると気付く。

ここで言うスイッチは、エロモードではなく、仕事モードのこと。

ゲームのヒロインと同化しているかのように、眼差しが熱を帯びていく。

「ちゅっ……ちゅっ、ちゅっちゅっ……上の服まくるね……」

頬から首筋までキスで下ったあと、ぐいっと、Tシャツごと俺の服をまくっていく。

そして、指先でこちらの脇腹を撫でながら、今度は胸板に唇を押し当ててきた。

「ん……ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ♪ふふ、前にゲームの台本を読んだ時にね……」

同じようにやってみたいなって思ってたの。

男の人の全身にキスをして、

とろつとろに溶かしちゃうの……」

「……乳首も舐めてみていい？　ちゅっ……ん……はあ、れろっ……ん、れろお……れろれろっ、ちゅっ、ちゅうう、ちゅっぱ……はあ、ちゅう、れろん……」

「ああ……っ、あねきっ……」

ヌメついた舌先で乳首を舐め上げられる度に、自分の意思とは関係なく、カラダが跳ね上がる。

とても処女とは思えないテクニク――

と、姉貴がエロゲーのヒロインみたいに思えたけど、実際は、技術云々じゃないんだってわかる。

姉貴は、弟の俺には激甘だから、すべての行為が丁寧で、愛情が伝わってくる。

よく俺を『愛おしい』って言ってたけど、それは嘘じゃなかったんだと思う。

とにかく舌使いが優しくて、同時に俺の反応をよく見ているから、瞬く間に、弱点を知られてしまう。

「んふ……ビクビクしちゃってかわいいね……  
お肌もスベスベで……ん、ちゅっちゅっ……ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」

「う、あああ……っ」

露出している肌に、片っ端からキスの跡が刻まれていく。

唇が離れる瞬間に、チロツと舌で舐められるのが予想外に気持ちよくて、声を出さずにはいられなかった。

「……ん、どお？ ちょっとでも、お姉ちゃんとセックスしたいって思うようになった？」

「おちんちんの準備はできてるみたいだから……  
あとは、心の問題かな……？」

心の準備だって、すでに出来ている。

というか、最初に初めて手コキされた時から、姉貴とセックスしたくて仕方なかった。

早く童貞を捨てたいから、そう思ってるだけ？

……いや、たぶんそうじゃない。

俺は、もっと前から姉貴に好意を持っていて。

高校時代、すでに俺の毎晩のオカズは、実の姉との性行為を妄想したものだった。

「んしょ……お姉ちゃん、重くない？  
……あ、おちんちん潰さないように跨がらないとね」

姉貴は一時的にカラダを起こし、足を開いて、こちらに跨がってくる。

エロゲーのCGで、よく見た構図。

下からの主人公視点で見る女性上位の体勢は、想像を遙かに上回るエロさだった。

「……ふふっ。これが騎乗位の景色なんだ……  
こんな風に、男の人を上から見下ろすのって、  
すごく新鮮……でも、少し顔が遠いね……」

言うや否や、姉貴は俺に抱きつくようにして、  
カラダをくっつけてくる。

たぶんっとした乳房に肺を圧迫され、  
ふたつの膨らみが、胸の上で押し潰れていく。

途轍もなくやわらかいの、水風船みたいに張りがあつて、  
その上、触れ合った部分がどんどん熱くなつていく。

「ん……ちゅっ♪ これでどう？ 顔……近くなつたよ？  
……ぼうつとしてないで、お姉ちゃんのこと……  
抱きしめてほしいな……」

言われるままに抱きしめると、  
さらにおっぱいが潰れていって、  
カラダより先に脳がイキそうだった。

前のラジオで話してたけど、姉貴は胸だけじゃなく、  
お尻も大きくて、それだけにクビレも目立つ。

まさに、童貞を殺すために生まれた、  
大量殺戮兵器。

ムチムチしてるのにカラダの骨格は華奢で、  
きちんと女の子してるからずるい。

この抱き心地は癖になる。

「……うん、そう……その調子……ん、ちゅっ、ちゅっ♪  
上手にできたから、これはお姉ちゃんからのご褒美……  
チューしながら、おちんちん触られるの好きでしょ？」

「ん、ちゅっ、はあ……ベロ……らふいて……ん、はあむ、  
んちゅ、ちゅうう、はあ、れろっ、れろれろれろっ、  
んん……ちゅううう、ちゅっっぽ、ちゅうううっっ、  
ちゅうううっ、んふ、ちゅううううっ、ぽっ……」

姉貴の得意技(?)でもある、ベロチュー手コキ。

普段は優しいのに、この時だけはほんの少しだけ、  
Sっぽくなる。

俺が舌を出しっぱなしにしていると、  
それを何度も何度も啄んでは吸っていって。

明らかに、キスは姉貴の方が上手い。

「……おちんちんにも、ペロチューしてほしい?」

おちんちんにペロチューというパワーワード。

俺の返事を待つことなく、姉貴は逆ハイハイをして、股間の方に顔を移動させる。

「おねえひゃんのこの舌れ……ん、ちゅっ、ちゅっちゅっ、ちゅっ……ん、はあむ、んちゅっ、ぢゅるっ、んぢゅ、ぢゅるるっ、んんっ、ぢゅっぽ……ぢゅう、ぢゅぽっ、ぢゅるるっ、ぢゅるるうっ……っ」

「はあ、れろれろっ、れろれろれろっ、んん……ちゅう、ん、はあっ、んん、ちゅっ、ちゅぽっ、ちゅっぽ、ちゅう、ぢゅるるっ、ぢゅうう、ぢゅっぽっ、ん、はあ……」

気持ちはいいけれど、射精するまではいかない、絶妙な刺激の口淫。

舌の動かし方が繊細で、後を引くような快感を裏筋に刻んでいく。

一生懸命、舌を動かしてフェラをしてくれてる姿は、シンプルに俺の胸を熱くさせる。

……こんなの、ガチ恋するに決まってるじゃないか。

「……おちんちんにペロチューするのは刺激が強すぎるかな。また、お手々にバトンタッチする?」

「ん……すごい気持ちよさそうな顔……」

お姉ちゃんもなんか……

お腹、ムズムズしてきちゃった……」

再び手コキに戻り、すぐそばで見つめられる。

俺だけ気持ちよくなってる申し訳ない気分だったけど、姉貴の嬉しそうな顔を見ていたら、それも薄れていった。

「……ねえ、このまま挿れてみない?」  
その……お姉ちゃんの……おまんこ、に……」

一瞬、仕事モードが途切れたのか、普段の恥ずかしがりな姉貴が顔を覗かせる。

俺から言わせれば、まちがいに清純な姉なのに、あんなシモネタ上等のラジオを任されるなんて……。



そこは、真面目な性格が徒（あだ）となったというか、現場の人やリスナーを喜ばせたくて、がんばりすぎてしまったんだろう。

……そして今も、きつとがんばりすぎてる。

「ていうかさ……まさかとは思うんだけど……ひよっとして……童貞、だったりする？」

「ええっ！？」

返事をするまでもなかった。

あまりにも童貞すぎる反応をしてしまったばかりに。

ただでさえ俺の感情を読み取るのが上手い姉貴だから、誤魔化しようがない。

「……あ、やっぱりそうだったんだ。何となく……そうじゃないかなって思ってたんだよね。今までの反応とか見えてきて……」

「キスも……手コキも……フェラチオも……みんな、初めてだったってことでしょ？」

それには、黙って頷き返す。

姉貴も結構、『こいつ、童貞じゃね？』って、怪しんでたっぽい。

「……怒ってる？ ぜんぶ、お姉ちゃんが奪っちゃって……」  
むしろ、感謝しかない。

でもそれを言葉にできない自分がもどかしい。

「……おちんちんを触りながら訊くことじゃないよね。でも、そっかあ……」  
まさか、自分の弟が童貞だったなんてね……」

「ふふっ、姉弟揃って経験がないなんて、そういうところはお姉ちゃんに似なくてよかったのに……ちゅっ……ん、ちよっと嬉しいけどね……」

考えてみたら、初恋も姉貴に奪われたことになるのかな。奪われたっていうのもおかしいけど。

……ていうか、俺が童貞だと知って嬉しそうじゃないか？

「でも、どうしよつか……お互い初めてだったら、お姉ちゃんのパージン奪ってとも言えないよね……」

「いっそのこと……お姉ちゃんが童貞をもらっちゃってもいいかな……もう難しいこと考えるのはやめて、二人で近親相姦……しちゃう……?」

「き、近親……相姦……?」

エロゲーの感想で、姉や妹を攻略する際、近親相姦への葛藤がないと、減点みたいな人もいる。

でも、実際に自分がこういう状況になって、わかったことがある。

ぶっちゃけ、近親相姦とかどうでもいいし、葛藤なんてない。

姉貴もセックスしたがってるし、俺もしたい。

そこに迷いなんて、あるはずないじゃないか。

「男としても気になるでしょ?」

……自分のおちんちんを女の子のおまんこに挿れたら、どのぐらい気持ちいいか……とか……」

悪魔のような囁きに、思わず生唾を飲みこむ。

手コキもフェラも期待以上に気持ちよかった。

それら以上に、気持ちいいことがあるなんて、今の俺には想像できない。

「ん……んん……ねえ、わかる?」

今、おちんちんの先が何にこすれてるか……」

「ああつ、ちよっ——」

「カラダを起こしちゃダメ……じっとしてて……?動いたら、おちんちん入っちゃうよ……?」

姉貴はサオを根元から握って、自分の割れ目にこすりつけていく。

咄嗟に上半身を起こそうとしたけど、それを止められて、完全な女性上位の体勢に。

がつつり跨がられても、まったく重くないし、姉貴のカラダのラインが綺麗すぎて、それに見惚れてしまう。

「んん……ん……あ、すごいおっきくなってる……  
おちんちんヌルヌルだから、  
滑って入っていつちやいそうだね……」

「……このまま童貞を奪われるのと、お姉ちゃんのバージンを奪うの……どっちがいい？」

「……ここまできて、逃げたりしないよね？」

しつかりと俺の退路を塞ぎ、  
キスできる距離まで顔を近づけてくる。

童貞を奪われるか、バージンを奪うか、  
どちらにしてもセックスするしかない選択肢。

姉貴も近親相姦の葛藤なんてしている様子はない。

お互い成人しているし、  
セックスへの興味が勝ちすぎている。

「お姉ちゃんに教えてほしいな……台本に書いてあることが、  
どういふことなのか……」

「おちんちんが奥に当たって気持ちいいとか……  
ゴリゴリこすれる感じとか……」

騎乗位の腰の振り方も覚えたいし……  
中で出されると、どんな感じなのかも……」

「中で出されるとって……ゴムは？」

「……え、ゴム？ ああそっか、普通はコンドームしないと、  
ダメなんだよね。  
生でしたら赤ちゃんできちゃうし……」

「ゲームだと、ほとんどエッチの時つけないから、  
なんか……感覚が麻痺してて……」

でも、前にラジオで避妊はしなきゃダメって、  
言ってた気がする。

本来なら、姉貴からコンドームをつけてって、  
頼んできてもおかしくはないのに。

「……ねえ。真面目な話、ゴムつけてほしい？」

「え……」

「初めてのセックスなのに……お互いをゴム越しでしか  
感じられなくていいの？」

……なんか、世の中のデキ婚が減らない理由、それがわかった気がする。

男も女も、発情したら止められないんだ。

しかも、お互い初めて同士。

この状況で、理性なんて働くわけもなく。

「ん……ああ、先っぽが入りかけてる……さつきから、おちんちんパンパンだもんね……」

「好きな方を選んでいいよ？ 今からコンドームをつけて、お姉ちゃんに童貞を奪われるか……それとも、このまま生で童貞を奪われちゃうか……」

さすがに、この選択肢はずるいと思った。

一生に一度しかない初体験だ。

そりゃあ、生がいいに決まってる。

「……ねえ、どっち？ 黙ってたら、生で決定しちゃうよ？ お姉ちゃんが妊娠しちゃってもいいの……？ ほら……先っぽがどんどんお姉ちゃんのおまんこを掘っていつてる……」

「……っ」

抵抗できない。

姉貴が妊娠して、声優の仕事を休まなきゃいけなくなったら、自分だけじゃなく、他のファンも悲しむのに。

このまま、挿れたくて挿れたくて仕方がない。

「……結局、生がいいんだ？ 男の子は正直だね……じゃあ、お姉ちゃんのバージンと童貞を交換しよっか。ごめんね、初めての相手がお姉ちゃんなんかで……」

覚悟を決めたのか、姉貴はゆっくりと腰を沈めてくる。

完全に任せっきりだったけど、入り口が小さくて、亀頭に、かなり強い抵抗を感じる。

「ん……んっう、んんっ……はあ……あれ？  
もっと簡単に入ると思ってたのに……  
おちんちんがおっきいから……んんっ、あっ……ああ、  
ちよっと……苦しい……ん、はあ……んっう、んんっ、  
はあっ、んんうっ……」

必死に自分の性器をこすりつけてきて、  
その健気な姿に、興奮を抑えられなくなる。

このままだと、いつ射精してもおかしくない。

オナニーは自分で刺激を調節できるけど、  
女性上位だと、そういった計算ができない。

「……はあ、そっちは平気？ おちんちん、痛くない？  
まだ半分ぐらいしか入ってないのに……  
圧迫感がすごくて……んんっう、んんっ……ん……」

半分どころか、まだ先っぽしか入っていない……  
という事実はさておき。

姉貴も初体験は痛いという情報を知ってるからか、  
少し動きが臆病になっているし、狭い膣口で亀頭を  
締めつけられ続けるのも、正直しんどい。

奥まで入る前に暴発だけは避けたい。

「……え？ 急に何？ お尻をつかんでっ……んあっ！？  
ああっ、やあっ……おちんちんっ、だめっ……  
無理っ……これ以上、入らなっ、んんん！？  
んんん！ んああっ、ああっあ、ああああっ！？」  
「んっう、んんっ……く……は、ああっ……入ってるっ……  
おちんちん、ぜんぶっ……お姉ちゃんの膣内につ……」

安産型すぎる骨盤の形に惚れ惚れしながら、  
両手で尻肉を驚掴み、一気に突き上げる。

なんだかんだで、男としては自分から動いて、  
バージンを奪いたいというのがあったのかもしれない。

逃げようとする腰を掴んで、ぐっと引き寄せた。

初めて味わった膣の感触は、とにかく狭さが際立っていて。

あとは、その熱さにびっくりした。

「ん、はあっ……待って、動かないで……少しだけ、  
じっとしてて……ん……はあ……ああ……  
これがセックス……なんだね……」

どちらにしても、姉貴に抱きつかれたこの状態じゃ、  
まともに腰を振ることもできない。

そして、動かずじっとしている間にも、  
どんどん膣内が愛液で潤っていった。

「……もお、童貞を奪ってやろうと思ったのに、  
最後は弟にバーจินを奪われちゃったじゃん……  
すごい勢いでおちんちん突き上げてくるから、  
びっくりしちゃった……」

密着した体勢だから結合部は見えないけど……

自分のカラダの一部が、  
姉貴の体内に取り込まれているというのが、  
不思議な感覚だった。

「……でも、そういう男らしい一面もあるんだね。  
ん、ちゅっ……ふふっ。これはオトナになったお祝いの  
キス……ちゅっ、ん、はあ……れろっ、ん、ちゅっ、  
んっ、ちゅう、はあ、れろっ、んっ、ちゅう……」

思ったより、姉貴も余裕があってホッとする。

こんな間近で、痛みで顔をしかめている様子なんて、  
見たくはない。

……ずいぶん馴染んだみたいだし、  
少しぐらい動いても平気かな？

「ん……おちんちん、動かしたくなっちゃった？  
でも残念だったね……今のこの体勢……わかるでしょ？  
女性上位、っていうの……」

動こうとする気配を感じとったのか、  
姉貴に先手を取られる。

両肩をぐっと押さえつけられ、さらに全体重を上乗せされて。

「これから、騎乗位の練習相手になってもらうから、  
覚悟してね？」

「いや、待って」

「はいはい、暴れない暴れない……  
ふふっ、まずはカラダを起こして……っ」と

姉貴のカラダが離れて、物理的にも『上から目線』になる。

もがこうとした手は恋人つなぎで捕らえられ、完全にペースを持っていかれてしまった。

「ん、ああ……やっぱり枕するのは違うね……  
実際におちんちん挿れて……男の人に跨がりながら  
動くのって……ぜんぜんっ……ちがう……っ」

「んっ、はあっ……お姉ちゃん……上手に腰……使えてる？  
んっ……ふっう……腰だけを動かすのって……  
難しい……どうしてもカラダ全体が動いちゃう……」

ぎこちないながらも腰を上下に動かし、  
ポリウムのある尻肉が、接触の度に乾いた音を響かせる。  
濡れ音もどんどん激しくなって、  
ペニスは限界以上に膨張を続けている。

手コキやフェラとはまた違う、膣コキの気持ちよさ。

手コキの圧迫感とフェラの閉塞感を足して  
2で割ったような、ハイブリッドな刺激に、  
何度も射精まで持っていかれそうになる。

「んっ、ふっく、んんっ……でも……前後に動くのは……  
だいぶ慣れてきたかも……どう……かな？  
お姉ちゃんの腰の動き……見える？」

上下の動きから、前後の動きに切り換えると、  
ベッドの軋みが大きくなる。

視覚的な興奮が強すぎて、腰の動きを見たいけど、  
目を逸らしたくなる。

「ん、はあっ……でも疲れたから休憩……ちゅっ、ん……  
少し動いただけでも汗かいちゃうね……  
うふふっ、ちゅっ♪ ちゅっ♪  
こうやってくっついてると、のぼせちゃうかな？」

よく、夏場におっぱいの下側が汗かいて大変って  
言ってたけど……

実際に押しつけられていると、  
蒸れるような熱さが広がっていく。

代謝がいいのか、全身もうっすら汗ばんでいる。

「お姉ちゃんのおっぱい、邪魔でごめんね……  
んん……なあと、顔をむにむにしてほしいの？  
じゃあ、おっぱいで耳塞いじゃう……  
ほら、ぎゅっうっ……」

「んぶっ！？ んっん、んんっ！？」

顔をムシヤムシヤとおっぱいに食べられて、  
こっちものぼせ上がってくる。

挟まれて改めてわかる、姉貴の胸の大きさ。

メチャクチャエロいおっぱいなのに、  
乳首の色は綺麗な薄ピンクで、まったく黒ずんでいない。

「……あ、息できるかな？ もう1回、耳塞ぐよ？」

んしょ……むにむに、むにむにむに……

そして、ぎゅううううう……うふふっ」

完全に俺をオモチャにしてるけど、  
このおっぱいの前では、無力でしかない。

堪らず、こっちからも頬ずりをして甘えてしまった。

「セックスって楽しいね……」

実は、最初だけちよびつと痛かったけど、  
今はなんか……お腹の中がおちんちんでいっぱい  
なってるのが、すごく幸せ……」

その幸せを共有したいところだったけど……

肝心のペニスは、すでに余裕のない状態だった。

またさつきみたいに、

杭打ちをするようなピストンをされたら、

瞬殺されてしまうかもしれない。

「……あれ、もしかしてお姉ちゃんの……気持ちよくない？  
顔をしかめてどうしたの？」

まともに姉貴の顔を見られず、横に視線を逸らす。

何とかして気を散らさないと、

腰の動きを見ているだけで果ててしまう可能性もある。

「あ……イッチャいそう……なんだ？  
がんばって、我慢してくれてるんだね……」

姉貴は、何もかもお見通しといった様子だ。

かと言って、責めの手を緩めてくれるわけもなく。





ペニスの硬度で俺の興奮の度合いを測っているのか、硬くなればなるほど、姉貴の腰振りも激しくなる。

限界だった。

息をつく暇もなく、全身を姉貴に食られる。

気付くと俺も汗だくになって、

シートに押さえつけられた両手で、  
必死に恋人つなぎを握り返した。

その瞬間、姉貴は執拗に俺の舌を吸ってくる。

尻肉で打ちつけられる接合音が加速し、  
身も心も、実の姉に蹂躪される。

「うううう！？」

「んっん！？ んん！ んんっん！？ んぢゅっ、はぁ……  
れるっ、ちゅっ、ちゅううぽっ……はぁ、はぁ……  
おちんちんから出ちゃったね……やっぱ男の人って、  
こっというのが興奮するんだ……」

自分でも怖くなるほどの強烈な射精衝動。

根元までぎゅちりと啜えこまれた状態で、  
搾精される。

少しずつ腰の動きが緩やかになっていく一方で、  
俺のカラダは波打ちっぱなしだった。

ほぼ痙攣に近い、制御不能な状態。

シートにへばりつくほど尻がびっしり濡れていて、  
射精しただけなのに、激しく呼吸が乱れる。

「……でも、**膣内で出したら赤ちゃんできちゃうかな。**  
**本当は、外で出してもらおうと思ってたのに……」**

その割には、しっかりと腰を落として、  
中出しホールドしてきている。

母性全開の優しい眼差しで見つめられると、  
自分がどんだんだメになっていくのを感じた。

このままだと、本気で姉貴から離れられなくなる。

毎日、中出しをせがんでしまいそうなぐらい。

「ごめん、我慢できなくて……」

「少し不安だけど、気にしなくても平気……お姉ちゃんが無理に言ってしまったことだもん……けど、どうだった？ お姉ちゃんの膣内で出すの……気持ち、よかった？」

「……お姉ちゃん、そっちの方が不安だったの。同じ女でも、アソコがゆるいとかあるみたいだし……初めてセックスしたのに、気持ちよくなかったら、申し訳ないなって……」

「気持ちよかったよ。気持ちよすぎて戸惑ってるというか……」

「逆に、こっちが心配だよ。」

姉貴は気持ちよくなかったんじゃないかって……」

「お姉ちゃんは気持ちよかったよ……？ ウソついてないってば……まだ『イク』っていうのは、わからないけど……」

バージンの子が初めてのセックスでイキまくるとか、それこそゲームの中だけの話だと思っし……」

そんな言葉を聴いて、少し安心する。

お世辞かとも思ったけど、まだイッてはいないという話が、本当に、正直に話してくれてるんだとわかって。

「あとね、ホツとしたこともあるの。」

お姉ちゃん、バージンでいる期間が長かったから……セックスに色々な幻想を抱いて……もしかしたら、期待ハズレに終わっちゃうんじゃないかって……」

「ただの取り越し苦労だったけどね。すごく……素敵な初体験だった……ほんとだよ？ これだったら、またしたいなって思えたもん」

それは俺も一緒だった。

エロゲーのやり過ぎで、セックスの期待値が上がりすぎていて。

インターネットの記事で、オナニーの方が気持ちいいなんて言ってる人もいたし、実際にするまでは期待半分、不安半分だった。

「本当は、お姉ちゃんがもっと上手にできたら……今より気持ちよくできたのかもしれないけどね」

「そんなことないよ、ほんと気持ちよかったから……」

少しずつ、頭の中が冷静になってきて、ふと、紅衣ほむらの名前が思い浮かぶ。

普通のファンは、ラジオで下着の色を訊くのが精一杯なのに、弟の俺は……当たり前のように、人気声優に中出ししていて

そのことへの優越感もあったし、改めて間近で見る『紅衣ほむら』のかわいさに感動していた。

「……なんか、いつ離れたらいいかわからないね。もう少し、こっやってくっついててもいい?」

「うん……俺ももう少し、くっついていたい」

「……ありがと。いつもお姉ちゃんのために、無理してもらってごめんね。大好きだよ、ちゅっ♪」

セックスしている最中のキスより、ずっと軽めの接触だったけど。

なぜか、頭の芯まで痺れた。

目が合うと、ふたりで恥ずかしくなって、視線を逸らしてしまう。

仕事モードが終われば、そこにいるのは、幼い頃から俺が知っている、真面目で照れ屋なお姉ちゃんだ。

……でも俺たちって、結局は何なんだろう。

ただのビジネスパートナー?

そうは思いたくない。

少なくとも、俺は。

ビジネスではないパートナーとして、姉貴を見てしまっている。

こんなに好きなのに、それを伝えられないのがもどかしい。

姉貴は俺のことをどう思ってるんだろう。

それを知りたいけど、知るのが怖くもある。

結局、この日から俺は、  
エロゲーの主人公たちと同じような悩みを  
抱えるようになった。

家族を恋愛対象として見てしまうと、  
こんなにも、モヤモヤするものなのか……と。

今は、それを自分の目の届かない胸の奥底に、  
しまっておくことしかできなかった……。

※トラック5へ